## 1) 検討式

適用基準:道路土工、仮設構造物工指針;平成11年3月;(社)日本道路協会:道路橋示方書·同解説;平成14年3月;(社)日本道路協会

$$Ru = qd \cdot A + U \cdot (li \cdot fi)$$

$$qd = 200 \cdot N$$
  $fi = 2 \cdot Ns$ 

fi = 10 ·Nc (Nc:N値の場合) fi = ·Nc (Nc:粘着力Cの場合)

ここに、 R : 上部工反力(kN)

w: 杭自重(kN/m)

Ra: 許容鉛直支持力(kN)

n:安全率(仮設支持杭:2 本設支持杭:3 仮設摩擦杭:3 本設摩擦杭:4)

Ru: 地盤から決まる杭の極限支持力(kN) ad: 杭先端地盤の極限支持力度(kN/㎡)

A : 杭の先端面積(㎡)

U: 周長で、杭の設置状況を考慮し、土と接する部分(m)

li: 周面摩擦力を考慮する層の層厚(m)

fi: 周面摩擦力を考慮する層の最大周面摩擦力度(kN/m²)

:施工条件による先端支持力の係数

N: 先端地盤のN値で40を上回る場合は40とする。

N =

\_

N1: 杭先端位置のN値

N2: 杭先端から上方へ2mの範囲における平均N値

:施工条件による周面摩擦力度の係数

Ns: 砂質土のN値で50を上回る場合は50とする。

Nc: 粘性土のN値または粘着力で 150kN/m² を上回る場合は 150kN/m² とする。 N 2の軟弱層では一軸試験等で評価できる場合を除き、原則として周面摩擦

抵抗は考慮しない。

## 施工条件による先端支持力度の係数

<u>他上水口でのの加入がが及るが次</u>					
施	工 方 法				
打 撃 工	法	1.0			
振 動 工	法	1.0			
圧入工	法	1.0			
プレポーリング	砂充填				
工法	による先端処理	1.0			

## 施工条件による周面摩擦力度の係数

<u> </u>					
施	工 方 法				
打 撃 工	法	1.0			
振動工	0.9				
圧入工	1.0				
プレボーリング	砂充填	0.5			
丁法	による先端処理	1.0			

## 2) 計算

上部工反力 R = 17 kN/本 杭自重 w = 0.025 m² × 8.0 kN/m3 = 0.2 kN/m/本 (末口18cm )

施工方法 打擊工法

安全率 n = 4

木杭寸法 D = 0.18 m



$$A = /4 \times 0.18 ^2 = 0.025 m^2$$
  
 $U = \times 0.18 = 0.565 m$ 

	 〈い先端極限支持力∶qd·A						
N値	$A(m^2)$		200	· N• A	(kN)		
2	0.025	1.0			10.0		

くい周面極限摩擦抵抗:U・(li·fi)							
						U·l·f	
土質区分	層厚	N値	粘着力	周面積		= 10N(or C)·	·U·I [粘]
	I (m)	С	$(kN/m^2)$	U·I (m²)		= 2N · · U · I	<u>[砂</u> ]
砂質土	0.90	3		0.51	1.0	3.	1
砂質土	1.30	14		0.74	1.0	20.	6
砂質土	1.70	6		0.96	1.0	11.	5
粘性土	1.10	2	44.0	0.62	1.0	27.	4
算定杭長 5.00 m U· (li·fi) = 62.6 kN					6 kN		

極限支持力は

$$Ru = 10.0 + 62.6 = 72.6 \text{ kN}$$

許容鉛直支持力は

$$Ra = 72.6 \div 4 = 18.2 \text{ kN}$$

杭に作用する鉛直荷重は

$$R + W = 17.0 + 0.2 \times 5.00$$
  
= 18.0 kN < 18.2 kN ( Ra )

故に、杭の鉛直支持力は満足する。